

私を担当してくださった 素晴らしきケアマネさん その2



執筆 ▶ 葉山 靖明 ● (株)ケアプラネット
「デイサービスけやき通り」代表取締役

今回も前号に引き続き、8年前の要介護時代に私の担当だったケアマネさんへのインタビューからです。



左手でパソコン打つ 練習堪えかね退職

私は発症前、簿記や法人税法の専門学校講師でした。講師としての職場復帰が最も大きなリハビリ目標でしたが、実際は経理担当への配属替えが、ほぼ決まっていた。そこに向けて週2回のリハビリ出勤。高速バスや電車に一人で乗って、杖をつき、バックを肩から斜めに下げながら、約1時間かけて通勤しました。勤務先の職員室のデスクに半日座り、左手でパソコンを打つ練習をしていました。いや、正確に書くと“させられて”いました。

そのころを思い出してそのケアマネさんは、こう語ってくれました。

「はっきり憶えています。経理担当で、パソコンを何分以内にどれくらいできるか、テストのような練習をさせられたでしょ?『ああ葉山さん、これは苦痛だろうな…』と、『耐えられないだろうなあ…』と思いました。『希望されている講師でなく、ここにカムバックされるかな?』と思いました」

懐かしい話です。私が倒れた発症場所でもあるこの職場。それゆえ卑屈に捉えていたのかもしれませんが。“パソコンを何分以内に”という練習とタイム計測を確かに“させられて”いました。

専門学校も悪意ではなく、早く打てるようになれば私自身の励みになると思って計画、そして実施したのでしょうか。しかし、発症後1年の右半身まひの人間にそういう練習は、辛いものでした。現実には、最も恐れなくてはならないのは、ストレスによる“再発”でした。だから、退職しました(こういった話は私の片まひ友達内では結構あります)。



通所の目的は デイの運営知るため?

退職時に私は荒れたでしょうか?

「いやー、そういう記憶はないです。もう、いきなり前を向いて、会社を作って『小さいながらも会社をやりたい』っておっしゃいましたよ」

ケアマネさんは、どう感じたのでしょうか?

「正直に言っていいですか?『あっ無謀だな…』』と思いました。無謀。もうその言葉だけでした…。でも、なんか全力投球でされているし、応援できるところは応援して、とだんだん思ってきました。だから、うちの法人も葉山さんのデイサービス立ち上げに協力しました」

私はケアプランの範囲というものをよく理解していないのですが、こういった協力は珍しいと思います。その法人のデイサービスに、私がケアや接客の基本を習得するために“傾聴ボランティア”にも週2で行かせていただきました

葉山 靖明 はやま やすあき

1965年福岡県生まれの50歳。専門学校で法人税法及び簿記論の講師を務めていた2006年、40歳のときに左脳の脳内出血発症し右片まひに。翌年それまでの職場を辞して(株)ケアプラネット設立。現在は、デイサービス経営のかたわら講義・講演活動を継続中。社会福祉法人「夢のみずうみ村」役員。人間科学修士



この連載を執筆するためインタビューしたいと電話をしたら、8年ぶりにわざわざ自宅まで来てくれ、楽しいひとときをすごしました

た。事務所内では、デイ設立書類やデイ運営に関する質問をさせていただき、教えていただきました。

ケアマネさんは、

「うちの上司に『葉山さんにデイ設立のノウハウなんか教えていいんですか!? 同業ライバルになるんですよ!』と言いましたよ(笑)」

そうだったのですね。実際に何から何まで教えてくれました。

“無謀”を“実現”に変えた、このケアマネさん。

“生きる”を支えてくださっていたのでしょう。きっと、この方には私は“生きる”を支えてもらっていたのでしょう。私は司法書士事務所では会社設立代行を依頼し、保健所に提出する通所介護開設書類をネットでダウンロードし打ち込み、銀行への借入金の書類を仕上げ、不動産屋さんを駆け回り土地を探し、工務店に相見積もりを依頼し、ハローワークで求人票を書きました。す

べて、私の左手のみで。そう思っていました。でも、どうもそうではなかったみたいです……。

私は、簿記、法人税法の講師であったのでいく分の事務的な知識はありましたが、今から考えてみると、このケアマネさんの心の支援、実務の支援、そして生きるための支援があったからなのかもしれないと、あらためて感じます。



何でも話せて 何でも聞いてくれる

発症後2年4カ月で、わが「デイサービスけやき通り」はオープンしました。

「ビックリしました。本当に実現できたんだ!と。そして、今までの既存のデイサービスと違って、利用者さんがやりたいことを提供するということでしたよ

ね。ユニークだったですね」

この後もインタビューは続きましたが、私ばかりがしゃべっていました…。

何でも話せて、何でも聞いてくださるこのケアマネさんのすごさが、今やっと分かってきました。“何でも話せて、何でも聞いてくれる”という環境の支援を、私は受けていたのだと感じます。

私の信念を分かってくださり、何でも聞いてくださり、心を支えてくださり、実務的な協力をしてくださり、新たな人生のストーリーができれば、それをまた聞いて下さる。

ここに“支援”という言葉の、奥深き本質があるように思えます。

そして、このデイサービス開設の3カ月前に、このケアマネさんが300kmも離れた鹿児島まで私に会いに来てくださったことを書きたいのですが、紙面の都合上、来月になりそうです。

今月の私

アメリカからの素敵なお客さま!



デイサービスけやき通りにアメリカのケンタッキー州から素敵なお客さまが見えました。ニューヨークでも働かれていたベテラン作業療法士のスーザンさんが、日本のデイサービスを見学するということで、光栄にもわがデイサービスに来られたのです。

写真は、デイの中庭にて。麦わら帽子姿の私が手にしているのは「門松」用の大きな竹。わがデイサービス内の実践的リハビリを見ていただきました。キャベツ・ネギの収穫、料理、洗濯物干し、囲碁手芸などなど。スーザンさんは「これらのアクティビティ(活動)はまるでライフ(生活・人生)そのものです!」と言ってくださいました。

言葉や文化は違えど、ケアやリハビリのコア(核)な部分は同じなのですね。